

大 会 要 項

1. 名 称 2018 JA共済杯 第52回全日本リトルリーグ野球選手権宮城・山形地区大会
2. 期 日 平成30年5月4日(金・祝)5日(土)6日(日)12日(土)予備日含む
3. 会 場 ベルサンピアみやぎ泉、仙台中央シニアグラウンド、鉤取球場
4. 主 催 日本リトルリーグ野球協会
5. 主 管 宮城県リトルリーグ野球協会、山形県リトルリーグ野球協会
6. 特別協賛 JA共済
7. 協 賛 すかいらく
8. 後 援 株式会社仙台放送 三井物産 産経新聞 サンケイスポーツ フジテレビジョン
9. 競 技 トーナメント(敗者復活戦)方式
10. 運 営 日本リトルリーグ野球競技規則並びに大会運営要項及び特別競技規則による。
11. 登 録 (イ)選手登録書に所定の事項を洩れなく記入し、4月14日(土)まで大会実行事務局へ提出すること。

■大会事務局

宮城県協会事務局長 浅野宛て E-mail: rifu-asano@live.jp

(ロ)大会登録料 25,000円は午前8時30分までに本部席に持参の上登録すること。

12. 参加資格 参加リーグは宮城県協会所属リーグおよび山形県協会所属リーグとする。
13. 構 成 チームの編成はリーグ単位とし、各リーグの選手はオールスター9名から14名とし他に監督1名、コーチ2名とする。
注:選手は平成17年(2005年)5月1日~平成19年(2007年)8月31日生まれの者
平成29年(2017年)12月31日までにリトルリーグへの登録を済ませた選手とする。
14. 選手確認 選手登録書により確認を行う。
15. 集 合 各リーグは、5月4日(金・祝)午前8時30分までに開会式会場に到着し、大会本に連絡すること。(開会式会場:ベルサンピアみやぎ泉 Aグラウンド)
○開会式は午前9時00分開始の予定。
○プラカード、リーグ旗を忘れずに持参すること。
16. 応援と協力①リトルリーグベースボール憲章の精神に則り、リトルリーグにふさわしくない内容のものは禁止する。
②参加代表リーグは当該試合に自リーグのアナウンサー2名を配置する。
③参加リーグからのグラウンド整備スタッフ5名を配置する
17. 会 議 5月4日(金・祝)開会式前にブリーフィングを行います。
宮城県協会・山形県協会合同理事会 午前8時00分~(予定)
18. 審 判 審判は宮城県協会審判部および山形県協会審判部が運営し4人制とする。
注:審判部は4月15日(日)までに大会審判員名簿を大会実行事務局まで提出とする。
19. 解 散 試合を終了したリーグはその都度グラウンドにおいて解散する。
注:閉会式は原則として大会最終日まで残ったリーグとするが、参加を希望するリー

グはこの限りでない。

20. 代 表 本大会の第5位までの各リーグは、5月26日（土）27日（日）宮城県で開催される「2018 JA共済杯 第52回全日本リトルリーグ野球選手権東北連盟大会」に宮城・山形地区代表として出場する。

大 会 規 則

I 大会規則

2018年リトルリーグ公認規定、競技規則、トーナメント規則及びガイドライン並びに公認野球規則を準用する。

II 登録及び義務

1. 選手登録

1) 年齢 選手は平成17年(2005年)5月1日～平成19年(2007年)8月31日生まれの者
平成29年(2017年)12月31日までにリトルリーグへの登録を済ませた選手とする。

2) 人数 14名以内

2. 監督およびコーチ

1) 監督 1名

2) コーチ 2名まで

3) 監督、コーチは成人のものに限る。

4) 携帯電話等外部と連絡する事が出来る機器類はベンチへ持ち込んで서는ならない。

3. 登録した監督、コーチ、選手のみベンチに入ることができる。

4. 登録選手の義務

登録選手は全員試合に出場し、規則区に明記されている特記事項全員出場の義務を果たさなければならない。

III 服装

1. 選手は全員統一した服装を着用し、ユニホームの胸にリーグ名の表示のあるものに限る。

なお、白色のアンダーシャツは認められない。

2. 監督、コーチの上着は襟付きの白、ズボンは白またはグレーで統一したものを着用する。

3. 監督、コーチの帽子は選手と同じものまたは白で統一したものを着用する。

IV 用具

1. 新規規格バット USABat1.10-バット (USABat - USA Baseball の青少年用バット性能基準を満たしていることを示すロゴが印刷されていなければならない。)

2. 瑕疵、変形等があるバットの使用の可否については審判が安全上の問題を最優先に判断をする。

3. 捕手は試合及び練習中も公認のヘルメット (耳カバー付)、プロテクター (ロングタイプまたはショートタイプも可)、マスク、スロートガード、及びカップを着用する。

4. バットリング、マスコットバット、鉄棒、メガホンのベンチ持ち込みを禁止する。

5. 野球用手袋、リストバンドの使用を許可する。但し、投手が投球する時はこれを認めない。

6. サングラスの正しい使用方法

著しく反射するレンズのサングラスの使用は認めない。フレームは黒色又は紺色に準ずるスポーツサングラスのみ。大会本部または審判部の事前確認にて許可を受けた物のみ使用可能。帽子の上に乗せることを禁止する。(選手・指導者・審判員とも同様)

7. ヘルメットの顎ひもを着用すること。

8. グラブのひもは必要以上に長いものは認めない。
9. 出場選手は安全確保の為、胸部保護パッドを着用すること。

V 試合の準備

1. ベンチは組み合わせ抽選の若い番号を一塁側とする。
2. 攻守は主将により、試合当日決定する。メンバー表は5部提出とする。
3. シートノックは後攻より7分間とするが、都合でカットする場合もある。
4. シートノック時に限り背番号なしのユニホームで3人まで自チームのボールボーイとして認める。
5. 試合前のブルペンでの投球練習を監督及びコーチが傍らで見ているが良い。

VI 試合の運営

1. 延長戦は無制限とするが、大会本部は選手の健康管理には十分留意する。
延長戦は7回までとし、7回で決着しない場合はタイブレーク制を採用する。
その方法は次の通りとする。
 - 1) 攻撃は一死二・三塁から始める。
 - 2) 打者は7回終了時のオーダーの3番から。走者は三塁が1番打者、二塁が2番打者とする。
 - 3) 投手は7回に登板していた投手が投球規定に従って引き続き投げる。
 - 4) 9回以降は8回終了時の継続打順とし、走者は8回と同様の方式で2人を置く。
2. 全試合3回15点差、4回以降10点差によるコールドゲームを採用する。
3. ベースコーチは次の条件を満たしていなければならない。
 - 1) 自チームのユニホームを着た有資格の選手と、監督、コーチが務めることができる。
 - 2) 2人の大人のベースコーチが許される。ただし、ベンチに監督とコーチが各1人の場合はこの限りではない。
 - 3) 大人のベースコーチもヘルメット着用が望ましい。その場合、できる限りチームと同じものとする。
 - 4) ベースコーチは自チームの打者、走者のみに指示することができる。
 - 5) ベースコーチは同一イニング中、ボックスの移動できない。
 - 6) コーチボックスから出て自チーム打者及び塁上の走者に指示した場合は、攻撃側のタイムの数に数える。
 - 7) 相手選手に対し威圧的な言動があった場合は、直ちに退場となる。
4. ベンチ内の監督及びコーチはみだりにベンチを離れることはできない。
5. 攻撃側がタイムをとり、選手に指示する回数は1イニングに1回である。なお、守備側のタイムのとき、攻撃側の監督及びコーチが選手に指示する場合は回数に数えない。ただし、守備側の指示より長い時間は認めない。
6. 監督、コーチが投手に指示する場合は、マウンドで行うこと。この時に捕手および内野手が集合してもよい。監督、コーチ及び選手はスピーディーに行動すること。
 - (a). 監督またはコーチが、1イニングに同一投手のもとへ1度行くことができるが、2度目には、その選手は投手から退かなければならない。
例：監督が1回に投手Aのもとへ1度行き、同じ回にBへ投手交代を行った場合、投手Bの

もとへ1度行くことが許され、2度目に投手Bは退くことになる。

- (b). 監督またはコーチは1試合に同一投手のもとへ2度行くことができるが、3度目にその選手は投手から退かなければならない。

例：3回までに監督が投手Aのもとへ2度行き、4回にBへ投手交代を行った場合、その試合で投手Bのもとへ2度行くことが許され、3度目に投手Bは退くことになる。ただし、同時に上記(a)の制限にも従わなければならない。

[協会補足]：本規定変更はメジャー部門以上に適用となっている。しかし、日本国内ではマイナー部門でも適用する。

7. 試合中に野手がマウンドに集まることは規制しない。ただし、試合の流れや頻度に応じて審判員が認めない場合もある。
 8. 投手のウォームアップ時に、打者などが打席に近づき、タイミングを測る行為を禁止する。
 9. 走者やベースコーチなどが球種とコースに関するサインを盗み、打者に伝達することはスポーツマンシップに反する行為である。審判員がこのような行為があると判断した場合は、選手と監督の両方が退場させられる可能性がある。
 10. ネット裏または観覧席から相手リーグの情報を伝える行為を禁止する。
 11. ベースコーチなどが、打者走者（走者）の触塁に合わせて「セーフ」のゼスチャーとコールをする行為を禁止する。
 12. 臨時代走
 - 1) 打者及び走者が事故等で走者になれない場合、臨時代走を認める。なお、臨時代走は投手と捕手を除く打順の遠い選手とする。
 - 2) 攻撃が終わっても前記の選手が速やかに出場できない場合は、選手交代となる。
 - 3) 頭部に投球及び送球を受けた時には、必ず臨時代走を出す。
 13. 走者がヘッドスライディングをした場合は、アウトになり、ボールデッドになる。
 14. 不正投球が発生した時は走者を進塁させず、投球しない場合もボールを宣告して投球数に加算する。
 15. 試合開始、終了の挨拶の時に監督は選手と一緒に整列する。コーチはベンチ前に整列する。
 16. 振り逃げ

第三ストライクと宣告された投球を、捕手が正規に捕球できなかった時、打者は次の場合は走者となる。

 - 1) 無死または一死で走者が一塁にいないとき。
 - 2) 走者がいても二死のとき。
 17. 試合規定

打者はバッターボックスに入ったのちは、その打席が終了するまで少なくとも片足はバッターボックス内にとどめておかなければならない。
- 例外：
- 1) スイング時、スラップ（走りながらの打撃）時、あるいはスイング途中停止時
 - 2) 投球により打席から出ざるを得なくなった場合
 - 3) 打者が“ドラッグバント”を試みた場合

- 4) 捕手が投球を捕球できなかった場合
- 5) 何らかのプレーが試みられた場合
- 6) タイムが宣告された場合
- 7) 投手がマウンド周りのダートエリア（土の部分）から外に出たり、投手が捕手から返球を受けたのちに投手板から5フィート（1.52m）以上離れ、捕手がキャッチャーボックスの外に出た場合
- 8) スリーボール後の投球を打者がボールと判断したにもかかわらずストライクであった場合
ペナルティ：打者が例外状態にない場合にバッターボックスを出た場合、審判員は打者に警告を与える。警告後に再度バッターボックスを出た場合、審判員はストライクをコールする。一人の打者に何度でもこのコールはなされる。

注：ストライクのコールが3ストライク目でない限り、打者はバッターボックスに戻り新しいカウントから打撃を継続する。

18. 故意四球

次の場合に、打者は走者となり、アウトになることなく安全に一塁に進める権利が与えられる（ただし、打者が一塁に進んで、それに触れることが条件となる）。

- 1) 審判員が“四球”を宣告した場合
- 2) 投球前に守備側チームから球審に対し打者に“故意四球”を与えることが伝えられた場合

注1：その指示は守備側チームの監督からなされなければならない。監督は“タイム”をかけ、タイムが認められたのちに打者に四球を与える旨を球審に伝えなければならない。

注2：ボールデッドとなり、塁上の走者は打者走者の四球により押し出される場合を除き進塁できない。投手の投球数には4が加えられる。

19. 正規の捕手が用具を装着している時の代理捕手

正規の捕手が用具を装着している時の投球練習を受ける代理捕手がヘルメットのみの場合は座って受けることを禁止する。立ったまま受けること。

捕手用具を全て装着している代理捕手であれば正規の捕手が来るまで座って受けることができる。但し正規の捕手の用具を装着するのを控え選手や指導者が手伝うこと。

20. 日本式2段モーション

日本式2段モーションは、そもそもアンフェアな行為であるし正しいモーションとはいえない。依って日本LLは昨年までと変更は無く、2018年も「禁止・罰則あり」とする。

※メジャー部門以下は反則投球でボールカウント1つ追加。インターミディエイト部門は走者無しの場合は反則投球、走者有りの場合はバークとなり走者は1つ進塁できる。

21. セットポジション時の軸足

セットポジションの時に軸足の踵部が投手版の側方部からはみ出しても罰則なしとする。

※「2013年版公認野球規則」にて改正されていたが日本LLでは採用していなかった。

LLのグラウンドの状況を鑑みると改正しても良いと判断し2018年度から採用する。

VII 監督、コーチ、選手の退場

1. 次の場合、大会本部及び審判員は監督、コーチ、選手を退場させる。

- 1) 自軍のベンチ及び応援席の中から、相手リーグ及び審判員に対し暴力及び暴言を吐いた場合、監督

及び当該者を退場させる。

- 2) 審判員の判定及び指示に従わなかった場合、監督及び当該者を退場させる。
- 3) VIの9、10で、同様の行為を再度審判員が見つけたときは
 - ①そのことに責任のある選手、コーチ、監督はその試合から退場となる。
 - ②打者は安打、守備側失策等で塁へ出た場合は打撃を取り消し、打ち直しとする。
 - ③打者が攻撃を行いアウトになった場合は、アウトを有効とする。この時に走者が進塁した場合（犠打等）は打撃前の投手が投球当時の占有塁へ全ての走者を戻す。

VIII 降雨、日没、時間制限等で試合続行不能となった時

1. 試合成立前に続行不能となった場合はサスペンデッドゲーム（一時停止試合）とする。
2. 試合成立（4回完了、または4回表完了で後攻チームがリードしている、あるいは同点）後に続行不能となった場合、勝ちが決められる場合は試合終了とする。
3. 試合成立後に続行不能となったが、同点で勝ちが決められない場合はサスペンデッドゲームとする。
4. 試合成立後にインニングの途中で続行不能となり、勝ちチームが決められる場合でも、先攻チームがその表の攻撃で同点とするかリードしており、後攻チームの攻撃が完了していない場合や後攻チームがリードを奪うことができないうちに中止となった場合、当該試合は再開しなければならない。
（注）サスペンデッドゲームはすでに終了したインニング数に関係なく、正確に一時停止された状況から試合を再開しなければならない。
5. サスペンデッドゲームとなり、その翌日に試合が再開された場合、中断時点で投手であり中断までに20球以下の投球数の投手は、続きの試合においてその投手の投球数はゼロからカウントする。
なお、別の日に再開されたサスペンデッドゲームでは、試合が停止された時点での投手は、必要な休息日を経過していれば、投球限界数まで投げ続けることができる。
（注）サスペンデッドゲームはすでに終了したインニング数に関係なく、正確に一時停止された状況から試合を再開しなければならない。
6. 中断までの投球数が21～40球の間であった場合、続きの試合においてその投手の投球数は中断された時点の投球数からカウントする。
7. 41球以上投げた投手は規定の休息日が必要となる。

IX 特記事項

「全員出場の規則」

1. 試合当日ベンチ入りした選手は全員試合に出場しなければならない。
トーナメントチームの試合時に、13名以上の選手が参加している場合はチーム名簿上のすべての選手が、攻撃において少なくとも1打席は試合に参加しなければならない。試合時に12名以下の選手しか参加していない場合はチーム名簿上のすべての選手が、守備において最低6つの連続したアウトと、攻撃において少なくとも1打席は試合に参加しなければならない。
2. a)4回表の開始前に、責任審判あるいはトーナメント委員長が指名した者は公式記録員と協議して、

両チームの監督に、以下に示される全員出場義務が完了していないすべての選手を出場させる義務があることをアドバイスする。監督が下記に示される条件で選手をラインナップへ組み込むことに失敗するか拒否した場合、監督は直ちに退場となり、残りのインターナショナルトーナメントからも解任される。

3. 1 試合開始時にユニホームを着用した選手が 12 人以下の場合：

a.先攻チーム：

全員出場義務の守備要件を満たしていない選手は、4 回裏の最初の投球（あるいは最初のプレー）の前に、試合が短縮されない限り 1 打席を含む全員出場義務を完了できる位置でのラインナップに加えなければならない。

b.後攻チーム：

全員出場義務の守備要件を満たしていない選手は、5 回表（の最初の投球（あるいは最初のプレー）の前に、試合が短縮されない限り 1 打席を含む全員出場義務を完了できる位置でのラインナップに加えなければならない。

2.試合開始時にユニホームを着用した選手が 13 人以上の場合、選手は次のように打席に立つためにラインナップに加えなければならない。

4. a.先攻チーム：

4 回、5 回のいずれかの打順、6 回であれば最初の 3 人の打順のいずれかの位置でラインナップに加えれば 1 打席が完了できる。（インターミディエット/ジュニア部門では 5 回、6 回のいずれかの打順、7 回であれば最初の 3 人の打順のいずれかの位置となる。）

b.後攻チーム：

4 回のいずれかの打順、5 回であれば最初の 3 人の打順のいずれかの位置でラインナップに加えれば 1 打席が完了できる。（インターミディエット/ジュニア部門では 5 回のいずれかの打順、6 回であれば最初の 3 人の打順のいずれかの位置となる。）

b)全員出場義務に関するアドバイスがなかったとしても、監督は全員出場義務規定を満たすことに単独で責任を持たなければならない。

c)試合が何らかの理由で短縮されない限り、当規則の例外は認められない。

注：ホームチームが勝っていることで 6 回裏または 7 回裏の攻撃（あるいは延長された回の裏の攻撃）を行っていないことは、試合が短縮されたとはみなされない。

d)この規則による全員出場義務規定を満たさないことは抗議の根拠となる。

5. メンバー登録表に記載された選手の 1 人以上がこの条件を満たさず、抗議されるかトーナメント委員会に伝えられた場合、トーナメント委員会の措置では、監督は退場となり、残りのインターナショナルトーナメントからも解任され、交代することもできない。さらなるペナルティもある。それには、没収試合や全員出場義務を満たさなかった選手に対する追加の出場義務、トーナメントにおけるチームやコーチの資格剥奪も含まれる。トーナメント委員会の意見としては次のようなケースがある。

6. 1. 監督、コーチが試合を茶化すような行動をとり、結果として選手が故意にお粗末なプレーをして、試合を引き延ばしたり、あるいは早く終わらせようとする。

2. チームが地区予選に始まりワールドシリーズまで（8-10 歳部門、9-11 歳部門では州大会

まで)の大会期間中に、2度以上全員出場義務規定に抵触する。

3. 監督が知らないながら故意に全員出場義務規定を無視する。
そしてどんな理由であっても、出場停止となった監督、コーチが試合会場にいることは許されず、試合にはどんな場合も参加できない。さらにどのような手段であろうと試合会場の誰とも接触することは許されない。違反は結果として、トーナメント委員会からの没収試合や以後のトーナメントにおけるチームや監督・コーチの資格剥奪も含められる。
- e. この規則でいう「守備において連続する6アウト」とは、選手が9箇所のいずれかの守備位置にいた状態で連続した6アウトをとることをさす。「攻撃において最低で1打席」とは、選手がノーカウントから打席に立ち、その打者がアウトになるか出塁してその打席を完了することをさす。
7. 負傷して退場した選手は出場条件を満たさなくても良い。
8. 選手の病気、負傷、退場で9人の選手を揃えられなくなった場合は、控え選手の中から交代選手を指名する。ただし、その人選は相手チームの監督が行うものとする。退場になった選手はこの再出場の対象とはできない。
9. 投手が全員出場義務を完了しており、打者の時に交代選手が出場した場合、実際に降板したのでなければ一度に限り投手として再出場できる。
10. すべてのコールドゲームに全員出場義務は適用しない。
11. 全選手が再出場できる。また再出場回数に制限は設けない。(全選手が何回でも再出場できる)
12. 先発の選手は全員出場義務を果たしていても交代できる。交代で初めて試合に出場した選手は、全員出場義務を完了するまで交代できない。

「投球規定」

1. 降板した投手はその試合では投手に戻れない。
 2. 投球数を制限する。
 3. 年齢別投球数 11歳～12歳は1日85球までとする。
- ※例外 次に該当する場合は投球制限に達しても投げ続けてよい。
- 1) その打者が出塁するか、またはアウトになるまで。
 - 2) 第3アウトが成立し、そのイニングが終了するまで。
4. 休息日
 - 1) 必要な休息日は次の通り。
 - ・1日に66球以上の投球をした場合、4日間の休息が必要。
 - ・1日に51～65球の投球をした場合、3日間の休息が必要。
 - ・1日に36～50球の投球をした場合、2日間の休息が必要。
 - ・1日に21～35球の投球をした場合、1日間の休息が必要。
 - ・1日に1～20球の投球をした場合、休息日は必要ない。
 - (注) いかなる状況下でも、投手は3日間連続して投球してはならない。
 5. 選手は1日に2試合以上の投球はできない。
 6. 投手が41球以上の投球をした場合、その日は捕手を務めてはならない。

7. 試合で4イニング以上捕手を務めた選手は、その日は投手を務めてはならない

(注) 4イニングはアウト数(12)ではなく、守備についたイニング数とする。

「スペシャルピンチランナー」

1. イニングに1回、1試合に2回に限り、攻撃側選手に対してその時点で打撃順に加わっていない選手を使用してスペシャルピンチランナーを起用することができる。スペシャルピンチランナーは1人の選手に対し1回のみ使用できる。スペシャルピンチランナーに交代された選手はラインナップから外れるわけではない。スペシャルピンチランナーがそのまま残った場合は選手交代したものとみなされ、打撃順に入っている間はスペシャルピンチランナーとして起用することはできない。しかしながら、その選手がさらに他の選手と交代した場合や、その他の打撃順に入っていない選手は再度スペシャルピンチランナーに起用することができる。

8. 「応援注意事項」

1) バックネット裏・ベンチ裏・外野での撮影・応援は全て禁止。(カメラのみ設置含む)
所定の場所での活動をお願いします。

X 補則

1. ベンチ内のプレーについて

- 1) 常設の正規の球場は競技規則通りである。
- 2) 仮設のベンチは危険性があるのでボールデッドとする。
2. 選手からのーフスイングのリクエストを受ける。
3. 全野手がファウルラインを超えた時にアピール権は消滅する。
4. 飛球をデッドライン、ホームランライン内で完全捕球したと審判員が認めた場合、選手が捕球後場外に出てもアウトである。なお、野手がボールデッド地域に倒れ込んだ場合は、ボールデッドとなり、走者に1個の進塁を認める。野手がボールデッド地域に踏み込んでも倒れなかった場合はボールインプレーとなる。
5. ネクストバッタースサークルは作らない。次打者はベンチの出入り口付近に待機すること。
6. 監督、コーチがグラウンドに入るときはコートを脱ぐこと。
7. ホームランを打った選手をたたえるときは、派手にしないこと。
8. 選手はユニホームをきちんと着用すること。

【規則改正に伴う注意点】

投球数のカウントについて

- ・ 休息日が必要となる投球数は、「その投手が対峙した最終打者へ投じた1球目の投球数が基準となる」。
- ・ 放送と記録の注意事項
投手降板の時は、規定により「基準投球数」は何球となりますと放送する。

全日本選手権大会周知徹底事項

I スピードアップ

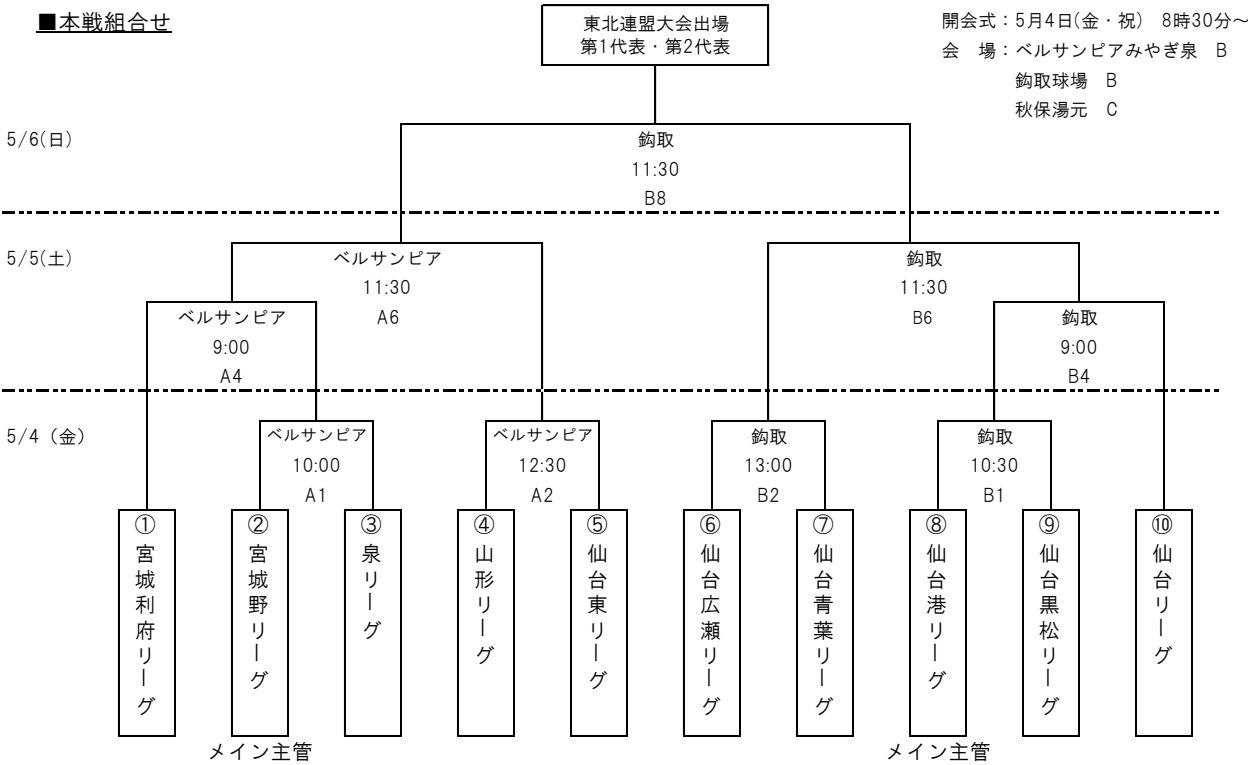
1. 投手はボールを受けたら速やかに投手板に付いて捕手のサインを受ける。
2. 捕手は受けたボールを速やかに投手に返球して、投手にサインを送る。
3. 捕手はホームプレートより前に出ないで野手に声をかける。
4. 内野手はボール回しを定位置で行う。
5. 内野手は外野手からのボールを定位置から投手に送球する。
6. 打者は打者席を外さずにベンチのサインを見る。
7. ベンチからのサインは短くする。
8. 守備につくとき、ベンチに戻るときは必ず走ること。
9. 審判員はスピーディーな試合を常に心がける。

II 安全規約（抜粋）

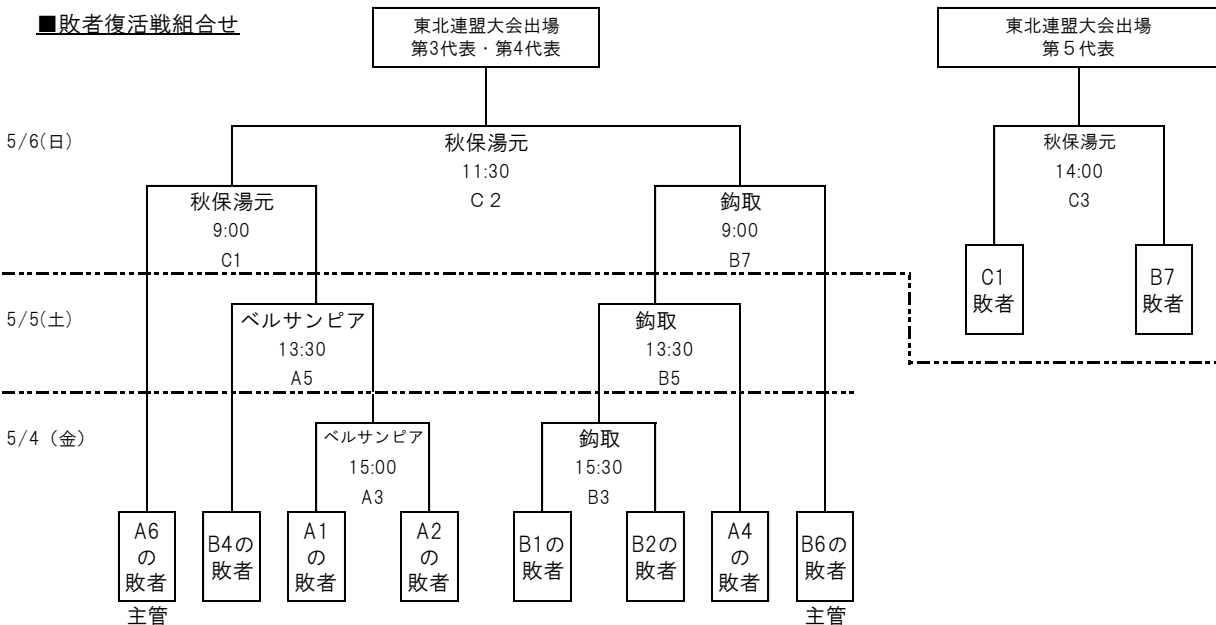
- ・グラウンドに穴があいていないか、傷ついていないか、ガラス等の異物がないかといった点検を頻繁に実施しなければならない。
- ・ダグアウトとバットケースはネットなどの遮蔽物の後ろに配置しなければならない。
- ・試合中や練習中は選手、監督、コーチ以外はグラウンドに立ち入らないようにする。
- ・打ち終わったバットや外した装具をフィールドから持ち帰るのは正規の選手に行わせること。
- ・ファウルボールを回収するための手順を確立しておくこと。
- ・練習中や試合中に、すべての選手が1球ごとに打者を注意して見るよう指導すること。
- ・ファウルボール等が飛んでくることのない安全な場所で選手たちをウォーミングアップさせること。
- ・道具は定期的に点検すること。それが適合していることを確認すること。
- ・打者は練習中も試合同様公認ヘルメットを着用すること。
- ・メガネを使用している選手の親には“安全なメガネ”を準備するよう推奨する。
- ・打者用ヘルメット、捕手用ヘルメット共に製造元の許可なく塗装してはならない。
- ・病気や怪我で退場した選手も、親か引率者に引き渡すまで監督下においておくこと。

2018 J A 共済杯 第52回全日本リトルリーグ野球選手権宮城・山形地区大会

■本戦組合せ



■敗者復活戦組合せ



※天候状況、コールド試合により、試合開始時間に変更される場合があります。
表記の開始時刻は目安ですので、予め余裕をもって会場入りしてください